

中等教育
國文讀本

訂正

二

15
241

館書圖京東					
四	二		一		
	四		五		
冊	號	架	函	類	門

橋本光秋先生編纂 卷二
小田清雄

中等
教育
國文讀本

版權所有 教育書房藏

國文讀本第二冊目錄

- 一 奈良朝と奈良のみろどとの支
- 一 天子の同異
- 一 ちどずづ
- 一 千世万代
- 一 をめるといふ語
- 一 父をテ、といふ語
- 一 和といふ語
- 一 詩のよみざま
- 一 皇國人の詩を作るは箏を搔鳴して琵琶の音



橋本光秋先生編纂
小田清雄

卷二

中等
教育
國文讀本

版權所有 教育書房藏

國文讀本第二冊目錄

一 奈良朝と奈良のみろどとの支

一 天子の同異

一 ちどずづ

一 千世万代

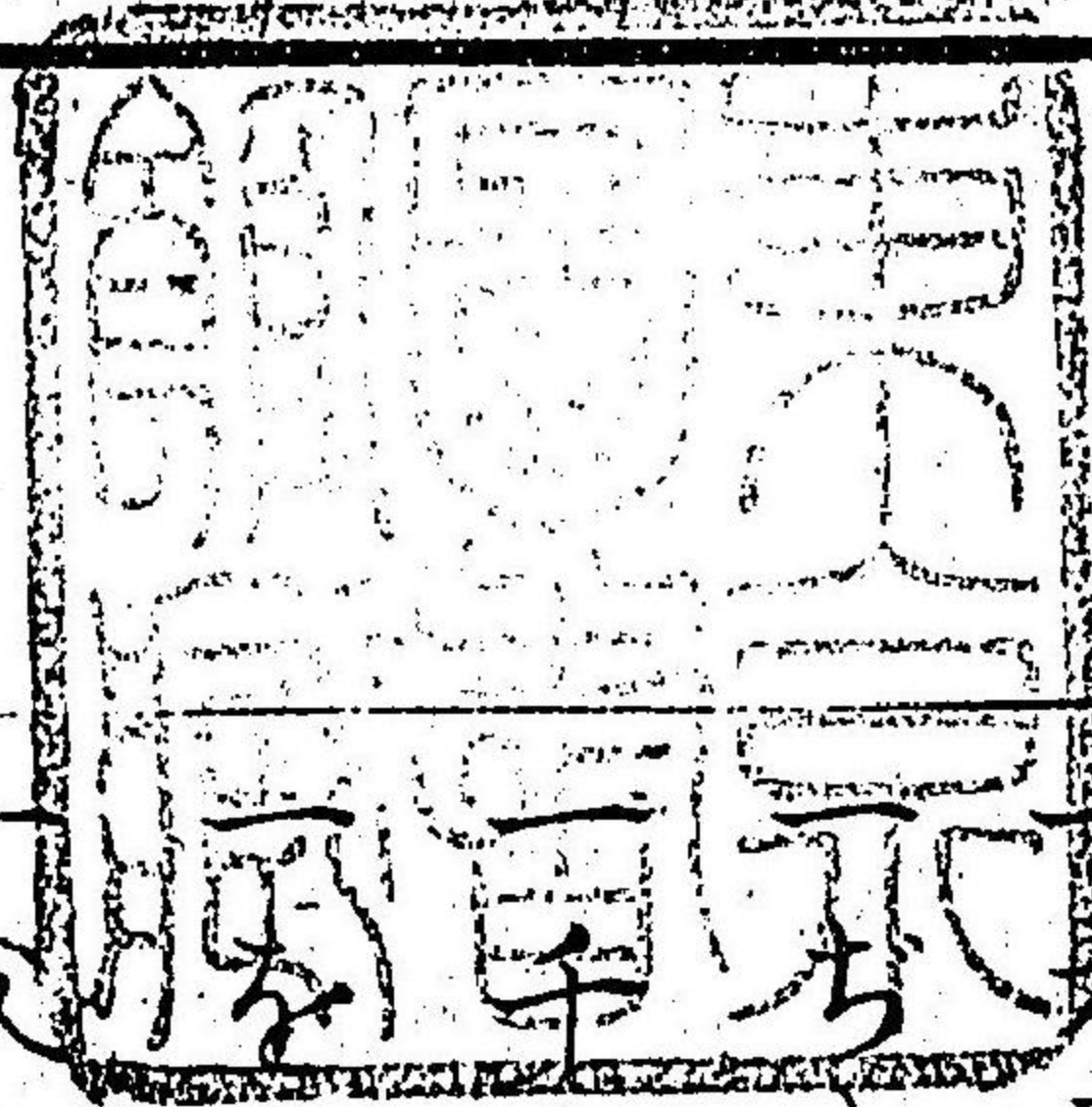
一 をめるといふ語

一 父をテ、といふ語

一 和といふ語

一 詩のよみざま

一 皇國人の詩を作るは等を搔鳴して琵琶の音



をもとむるがごとし

一機巧

一中原貞説が強記

一繪仏師良秀我家の焼くを視て火炎の急が
きかたを心得

一繪よりて供米不法の支やむ

一繪雜房

一壁者隣家の釜を盗む

一治承四年の遷都

一養和年の大飢渴

一治承四年京の風災

一元暦二年の大地震

一赤えとつふもの

一大鳥飛行の速力

一皇威象よ及ぶ

一猿の人真似

一紅毛人萬里鏡を貢す

一柿本人麿小神号を授けらる

一枕の喰ひのこし

一山本晴幸の明眼

一 まこととのたのしみ

一 自警

一 後奈良天皇紀の逸史

一 下毛野公助が孝行

一 まつらさよひめの石とありとありとあり

一 曾我兄弟 大石主税

一 單物 帷子

一 儉と吝との別

堀秀政 黒田如水
小笠原平内

一 伊勢國

一 筑後國山門郡本郷馬場記

一文を何のためにかくものぞ

一歌を何のよめふよむものぞ

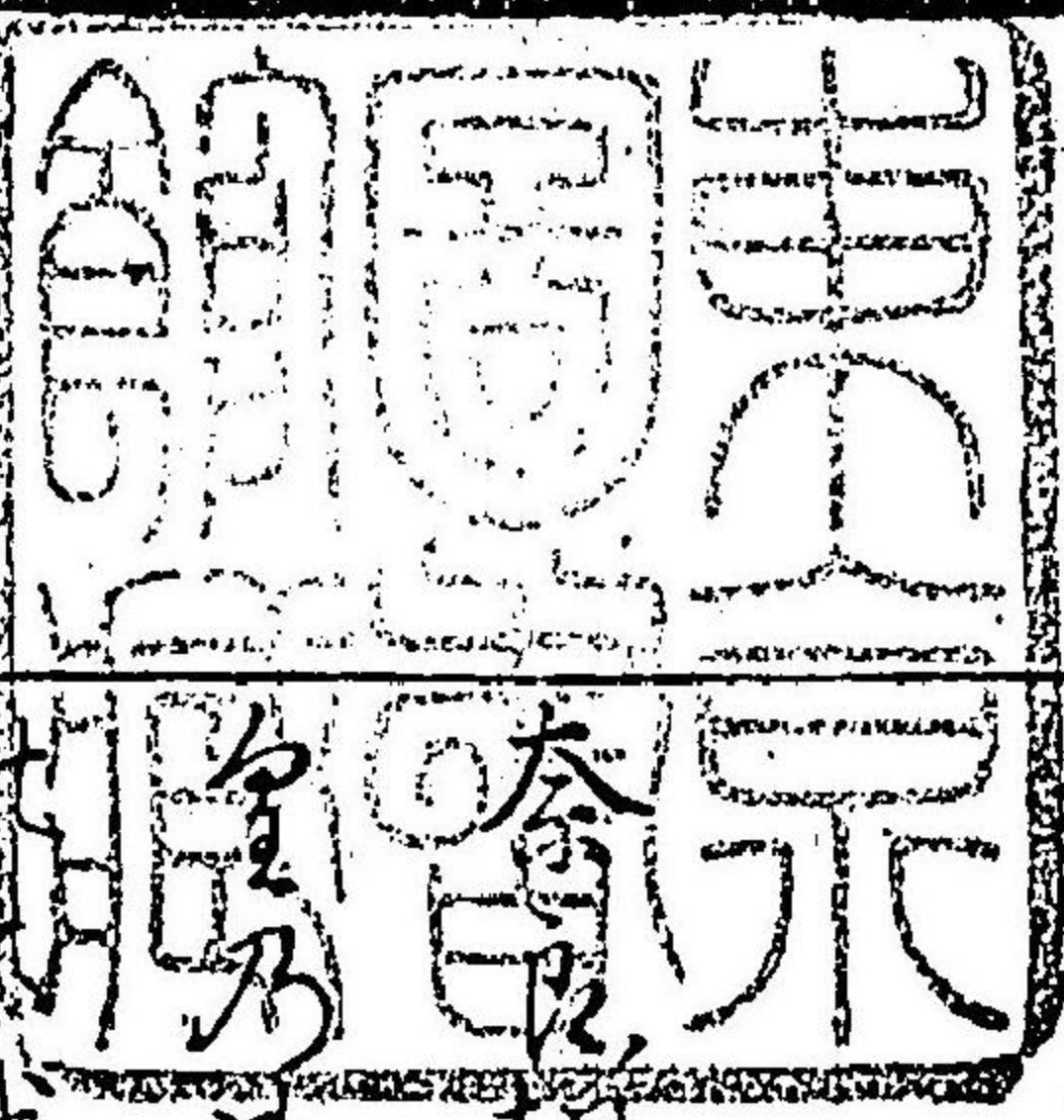
以上

國文讀本第二冊

小田清雄
橋本光秋 同編

○奈良朝と云々のみろど、此事非依板

足代弘訓



奈良朝といふは天和の奈良に都したまひて天皇
御代々をいふ元明元正聖武孝徳廢帝稱徳
天皇の御代なりあるのみかどいふを平保天皇
と然るに昔より奈良朝と云はれみろど一
つに心得る時代をあやまるあや多し古今集乃

序ふと此誤あり平城天皇詔侍臣令撰萬葉集自爾以來時歷十代數過百年とある是なり醍醐天皇より十代以前を平城天皇なり延喜五年より百年以前を平城天皇乃大同元年なりさて萬葉集は第二十卷の終此歌奈良朝孝謹天皇天平寶字三年正月一日の歌あり孝謹天皇を醍醐天皇よ里十五代以前ふり年數も百四十七年前也これ奈良朝とあら乃みうとを一つに混と誤きなり。

○天子乃同異同異

石原正明

天子といふ稱をから國よりうけ里来り也されどりつ天皇を日乃神の弟後よねりませば天子とと天孫ども天神子とと申して其ふがれ兼也無窮乃天子にねりませばから國ともやうかたりて實にもをりし稱あり志のるを公武令義解スベテ凡人君者父天母地故曰天子とあるを況説故事と云ふ例あれどから書の抄書にも朝にを匹夫より夕にも天子たりといふ王者はかざりにいふ事あり皇國乃天皇をさるしゆ急にはねりませばから國の天子を春秋繁露に徳侔キ天

地者天祐子之故稱天子とある如くうを履をか
ざりとする稱也がれが代天用事ものに行われを
天宰といふべきが如く子といふとどの似合はるか
らだ古き書ふ日出處天子日没處天子とあり天
子といふ名を同じくして其意をいいたく異なり

○ちどづす上同

同 上

九國四國乃人の物ついにもちととづとすと
此濁音がはづかりわるとつふを其國この人に
あひて物つふをまてをう心をはやく過一つ
るをさいつ比思ひたうと松平肥前守殿乃家臣

峰六郎矩尚といふ人れもこれゆきとつり物語を
るおどよ心をつけくまけをれのづうを別あり
ちづれ濁を舌短ま人乃物つふごとくねもくつひ
づさきが如くさる舌のまきを上唇にさうあ
てくちといひづといひをうはまつ故ねもくつひ
がさきが如きなりとずといひまよやからくや
すげ也といひはとむるほど清めろが如くはる末よご
るたのふ小舌を下齒にさうあてさまにといふ故舌
乃齒といひまよさうあてぬほどを清者の如くに
くおてはつまを濁るにやあらんおめよ聞きわけ

とげふを、かゝりかゝりの事は、これ聞かけんとして、
つやひひききてかたりぬ。其後を、其園に乃人に逢
ひく物かたりききり、すづき心もほくば。

○千世万代上

同 上

千世万代を、万年万年といふ事也。世數千萬をか
ふるにあはれ、それを一年乃まよだうによめる
歌、新古今集に、式子内親王、へとて行くよ、乃休
のきくらし、重とふりぬる、年のくれ歌、此よ、は
年といふ事なり。

○をめるといふ語

船 鱸 訓

伊勢貞丈

小見の見知りぬ人を見て、恐るる人を、めと云
ひ又、貧賤乃人、よまた、海富貴、此人の、庭に入りて、
恐るる氣色あるを、めると云ふを、めるとを、恐
るる義にもあはれ、尻おみりて、退く氣色ある、
云ふ、退け、字ヲメルとよむ、びー、公家の装束、小を
めら、かすと云ふことあり、官女乃五つ衣、おど五つ
かさぬるによふ、重ぬる衣を、おどり、袖口は、まむ
そなど、を、腰々、次第、小志、さらか、く、纏よなり、と
と、む、小町、小町、おど、此、結よ、おど、神、ぐら、づ、ます、そ
乃、重り、く、る、体、の、如、く、志、さ、ら、か、す、を、を、め、ら、か、す

と云也。人をめたごとくふと退くなり。

○父をていといふ言神係 是代弘訓

父をていといふ言をも俗言にあはべつば物語
後薩卷よ母もていの手にとまきりて大鏡卷七
ていごに云くまふはさせたまひける業花物語
月宮巻にていごとくあひまきこはたまひけるなど
あり祖父をねほていといふ言もあり同物語
衣乃玉巻ふねほていねほけたりけるを志
でと見はより

○和といふ語休暇

渡邊重春

○祖父
重名といひ
て本居翁の
門人ありき

我祖父君乃ある時鈴屋翁に問をれけるを後撰
集に神を月をれむうりたるらばいと雪がて
よさつなごのあつらむと云ふ歌あり昔前玉の
俗言よ物を併はる事とカッルと云つらざれを
此雪がてを時雨に雪は交する意を誦めらにを
つらざらものと問ひければ翁の云をれけるを此考
つらつと面白く今実名に和の字をカズと訓むは
當らばカツと訓むべしと答ありしより物乃端に
記しねられつらつを見出づるまふまに此所に載し
つらほむ乃集の事を祖父君の考を翁と問はれ

けるに翁の答へられし書ありて後撰集問答と
号けられし

○詩のよみざまつま 本居宣長

幸蒙抄にある人の書よまうで、東行南行雲
渺、二月三日日遅々といふ詩を詠どけんにす
し、まどらみたる夢に、とさすふゆき、かうさまに
ゆきてくもたるばらまき、さうぎやまひ日うら
らとこそ詠ずれと仰せられけり云々と仰りむか
し、え詩をとらるけくた、かくさすふこをよみあ
げけぬ、福むるをさうなり、つみへをすべし、か

づみをよむは、さうまら、かぎりは、ミクニ國言よみあ
る字書モジゴエを聞きにくか、モジゴエが故也、モジゴエを今をか
さまにたりてあづ、乃、詞と、モジゴエ國言より、モジゴエ字書あ
るをうら、けし、さう、モジゴエ書よむは、さう、モジゴエかぎり
は、字書によむをよむ、さう、す、あ、モジゴエか、モジゴエづみま
なび、乃、さ、モジゴエに、モジゴエ字書よむ、か、モジゴエさ、モジゴエ故とあ
れをぞか。

○皇國人の詩を能るを筆をかき、モジゴエて、モジゴエ選
の書をもとむるがごとし、モジゴエ寄居

近菴芳樹

もろこしの明乃代に李干鱗といふ人ありけり。
かゝるあふれはうまれありけれを都に出で、名
高き博士どとにまゝを重て請つくるふどもを
まゝを入都乃りてを平都ふつらひと笑はる、幸
阿りけるをくらをいぢりて、阿る處乃舎に、い
さ、かれ阿るどありけるに舌乃を記き、いかに
まゝりて血を盃よそ、さ酒ふまど一のこをいひり
けるをりいふ、いびこ乃阿やまら被犯いなど
それなりい舌れのぢりくひつくは、いづといひりきと
ぞ、其のれは詩乃す、いづといひりくなりて、つひに

五季二家とありてもてをやするやうになり
けり。こ此事謝肇淛が詩話に、見ゆねあり、
一此内にくま、所かを述ば、かく四考のけぢめ
も不正乃こと、れ阿るをすて境をる如に、
どたきること、此邦乃人れが、その詩をまゝ、
まゝと小考、い功ま、くあ、くや、い、ん、ば、述、ば、
國乃人にく詩をつくるを、た、い、を、筆、を、か、き、
い、と、琵琶の音、れ、と、む、る、が、如、い、つ、い、を、
て、鐘、乃、く、を、な、さ、い、ん、と、ま、ま、ま、ぐ、の、た、
に、を、あ、い、ま、い、ま、い、な、い、づ、と、か、た、わ、さ、
ふ、こ、と、

○機巧まがひ

荻 礼卿

備前岡山表具師幸吉といふと此一壺をどうへ
 と其身の輕重、羽翼の長短を計り、自身の重さを
 かけくらべて、自ら羽翼ツバを製し、機カタクリを設け、胸の
 前ふく操搏アヤシちて、飛トビりまじ地より直に騰トビるまあり
 まじ屋上よりたゞちていつある夜郊外ヤチノをかけり
 廻りて一所野宴ノあるを視下して若し知する人
 にはや近よりて見んとまゝに地チに近づけむ風
 力よしくなれり、思まじ落ちたりければ、此男
 女メカねどろきさけびと逃げり、里けり、あとにこ

酒肴サケウチをに耽りたる哉幸吉、あぐまぐ飲みこひ
 しとまこと飛トビびきるとまゝに地よりたゞち騰
 り、がときゆゑ羽翼ツバををさめ、歩して帰せけり。
 後に此事あるを、市尹の廳シヤウより出され、人乃
 せぬるをよめるたゞきみといふと一川の飛ぶ
 りとまゝ、兩翼ツバをとりあげ、此機カタクリめる、巷チヤウを遁放トビせ
 られ、他乃巷チヤウにうつりかたれけり、一時此笑ワケ
 柄ハのみなり、いざと珍ウツクシしきるあれむ、
 乃前此事あり。

○中原貞後が強記チカキ

橘 成季

宇佐大官司なるふがしやかや、痲病をうけたる由
關江ありて一門の者共改補せしむるまよし訴申し
けれを、大官司をせのぼりて、醫師に見せしれと
実吾をさどめらるるまよし奉り侍りけしは、和
氣丹波のむねとあるとどがらに清君ありけり。
中原貞説もたなづく呂に應じて清君に頼りけ
り。若、白癩といふ病のよりを奏しけり。療治まづ
まよし乃勤文なるづまよし作下されければ、め
んめんに罷出でしるまよしと素す願ふ由申しけ
るに、貞説申しけるを重代し罷ざる身に、一巻乃

文書のとくは、つなぐ知りて、竹の程社奉ら當座
に、^{カガ}勤申す願ふとく即志するし申しけり。まよし
もろ乃医書ごとく皆意く引きのせま、ゆゑに、
し申しとりければ、感ありと申しりくるふ隨
ひく和氣乃姓杖路をせけり。後にも、^{ミサ、キノカミ}諸陵正ふ成
まよし孫のまに、いはず。

○繪佛師良秀君の家を焼くるを視て、不動乃
大空に、かきかたを心得、^{宇治拾遺物語}記者不知

おれも今をむかひ、繪佛師良秀とつふありけり。
家乃隣より火つて、まよし風ねおほひてせめけ

れを逃出ぞく大浴ついでにけり人のかくする佛も
 ねけしけりまゝ衣箱妻子などさきながら内
 ありけりそれも志くばだも逃出でしるをこそふ
 してむらゐのつらにたてり見れをまごにこそか
 ふうはりてげぶりほのほくゆりけるまゝく大か
 たむらゐれつらにたちてまごあければあさま
 しね妻とて人かまきまぶらひけれざさかか
 りつらと人いひけりまごむらゐにちかきか
 るを見くつらうまごまごかきとねしつらひけり
 あもまごつらまごつらわくかまごつらつはわろく

かきける物のまごつらまごにまごつらひよまご
 まごもまごつらにかくてもまごつらまごあさま
 しねまごかま物のつきまごつらまごつらひけれを
 なんとまご物乃はくまごまごつら不勅尊の火を
 をおくかきたるなり今見まごかきこそ龍江
 けれと心得けるありあれこそまごつらまごよまご
 みちをまごつら世にあらんはまご佛ごにまごかま
 奉らば百千乃家ごいごまごまごつらまごつら
 させる能とねけさねを物をまごまごつらまご
 こそまごつらまごつらまごつらまごつらまごつら

がよむり不動とく今又人のめぐあつり。

○繪によりく供米不法乃事やむ古今著聞集

橋 成季

有羽僧正を近き世にもなうびふまに陰書なり。法
勝寺金堂の廳乃繪書きしもの人也。いつ程のふにの
供米乃不法此事ありける時に繪ふ書かれけり
過風乃吹きたるに米の俵をねりく吹上げし
が、塵灰此如くに空ふあがりふを大善法脚系を
しやちりて取どぐめんと志するをさまざまにね
しりろり筆をふるふくかくれしりけるを誰の志

とりけん。其繪を脱淨らんとて法入奥ありけり。其
心を僧正に淨たづねありければあまりに供米不法
にゆひく實れ物を入まひたぞ。糟糖ヌカのみ入ましく輕
くゆふ故に過風よ吹上げられゆふをさりとてたと
てお法師をらうが取どぐめんごゆふがをのうゆふ
を書きそゆふと申されけり。此は眞の事也。そそれよ
り供米の沙汰まびく成りて不法の事ありけり。
○繪雜房上 同 上
後、白河院時繪雜房といふ者ありけり。いかによ
く書きたる繪はとがあはれ雜を見つゝたをれ

あまけり或時ふるまひ上るるに書きてしる臨本
乃中人の犬を引きしるに犬まきひくゆかど
と志しる鉢まきしるに書きてしるくやう也又
男のかくぬぎしるにつまふりかたげし大木を切
りしるあり法を此信よ是をバ繪雜房も力及を
ト物をどし即召して見せしれけきばよくよ
く見て目出度くい書きてゆふが難少々ゆふこれ程
すまひしる犬乃首繩を志ししるの志しよりよ
くひますどされくゆふ難き也これをだひすまひ
く頸繩普通なる鉢に見ゆふなり又木切を

る男目出度くゆふ但しこれほど乃大木すすぎ切
入りてゆふに只今ちりしるあけらなをりにて前
に散りつちりたるありこれなきある難しゆを申
しけきを法を作せしる事もなきて繪を裁さ
められにけき

○壁者階家の釜を盗む上 同 上

中納言兼光卿建久二年十二月廿八日又檢非違使
別當に來りし廳務にこれこし沙汰ありけるよ
賊者の小屋ふちひさき釜れうせりける哉隣
なりける腰居のぬまみしるけしきありて賊物

をさがし出しけりけるに腰居申しけるは金を
もちてこそぬざりあるまじい金をはあれてい
うでう取付るづま。他人ぞ盗みくねまき付ん
と陳トければまことと申す所理ありと沙汰あり
けれどぬまされたる者乃訴訟つよくて大狸の門
前に召出しと内問ありけり相違申すのざりけ
るに別當謀をめぐらしと此腰居申す處不便あり
たゞ此金を腰居にとすべしと作下されたり
けきを腰居よりこびてがらにおろつきておぼ
しむるを見く實犯ありけりかとの男あま

ごとかくしてぬすみとけりときとをり科よお
まををれけり申しきはうりことなり。

○治承四年の遷都 方丈記 鴨 長明

治承四年の氷至月乃はふをぬふ都うけり結りま
つや思此外なりし事也。大かこ此京の始を岡け
む嵯峨天皇の御時都とさごまりにけるより後
まごに數百兼を種よりこやに故なくとたやす
くあらしまもづくもあしねばこれを世世人やま
うらげうれしあし極ごとまりみも過ぎたりされ
どとつくりふしなきて御門よりたどめとてま

たりと大臣公卿皆悉く移り居ひぬ事ふつらふる
 ほど此人雅のひとり故郷に跡を去らん官位よ
 も思をわけ至君此のげをも頼むほど乃人は一
 日たりとととく稀くんとはげとあり時をう
 あひ世にあまされく期する所をなまじのを然
 一なりとととまりを里新城あらそひ一人のま
 ひ目を踵は、荒行まご家を出ぼされく淡川あ
 うび地を目此前に畠とならん乃心皆あつて
 てたゞ馬鞍をのみ重くも牛車を用とまらん人な
 一西南海乃所領をわづい東北國の庄園をい好

まげ其時たのづかう事此さよりあきて揃津ふ
 今乃系に玉きり所乃ありままを思ふにその地
 不どせむくして條里をこるふううげおを山ふそひ
 と高く南を海に近くと下きり波乃毒をにうま
 びすくして塩風おとまげく内裏を山乃中ふ
 れをが乃本丸殿をかくやと中とやうかけりく
 優なるかとを侍りま日くにこぼちく川をせに
 はとびくごの家いげくよ作まるとのあらんな
 ほむあいま地を多く造まると屋をまくな古郷
 を既にあれて新都をいまごなるべありやあ

る人みふ深き乃思をふせり。もとより此所に居
る者も地をうしなひと愁へ今うは重位む人々
土木の煩あるを歎く。道は色をんれた車にの
る座きた馬に乗り、衣冠布衣あるべきも、たかく
直垂をまきこり、都乃條里とらまらに何とてまじり
てとびびるも、武士にこそあるは、是れは世乃
乱る、瑞相とか開きたけり。とて、く日を経はく
世乃中うきまちく人乃心とをさまさるは、民は熱
つひよ空一からざりければ、同年の冬なす、此系
に帰はひにきざれど、とぼらとて、さやう家ごと

いふにありふけるにか、悉くもこの極にもつくら
ずば、はらに傳聞くふづり、乃か、とて、治代に
を、懐をもく、國城をさめ、別所殿、又茅をふき、と、軒
を、とて、やの、つ、煙、は、と、の、ま、を、見、給、ふ、時、を、か、能
り、ある、み、つ、ぎ、物、を、さ、し、申、さ、れ、ま、は、お、ま、民、を、あ、と、
世、は、た、ま、け、給、ふ、ふ、り、て、な、り、今、乃、世、の、中、の、有、極
む、り、に、な、ら、ざ、り、て、知、ら、ぬ、づ、り、。

○養和年の大飢渴上 同 上

養和乃は、と、よ、久、く、な、り、て、く、う、や、と、覺、は、ず、
二年が間飢渴して、沙す、ま、さ、り、ゆ、り、ま、さ、り、或、は、春、夏、ひ

どり或も秋を大風大水などどつらぬ事ごとお
 續きて必穀こごとおどくみ乃らば空しく春耕し
 夏うゝるつやなみのみありく秋刈り冬収むるそ
 めきはあし是れよりて國この民或も地をまて
 て場を出ぐ或も家を忘れく山に住む極く此法
 新けたままなべてあしぬ法ごとけをるれども
 更ふ其りるしなし意乃ちむひふにえに付けても
 みふもとは田舎をこそたれめらふ絶はてのぼる
 そのあけれどさのみやもみさをもつくりあつん
 念し他びつて寶物かたけしより捨はるごやとく

すれども更に目見とつる人なりとまた備かふる
 そのを食を軽くし粟を重くはる食道のづに多
 く愁悲しお考再よみたりとさき乃年かくのぶと
 くかしくし言れぬおくる手をもとらなむるづ
 まうと思ふにあまもつ疲や瘧おそひくまもる
 様に臨うとなく世れ人いふ病死ヤシければ日試經
 つまきはまりゆくさま少水乃魚れとつふ叶つり
 けしはを笠うら着足ひきつみどろしき染し
 くる者ひくまら家ぶとにきひありまかくとび
 一としいまのどおあつくのともみれを別ふれ

死ぬついでにこれほく、路傍に飢死ぬる類ひを教へ
らば、取捨つるわざとなければ、くさまき香世界にみ
ちをちとくをり行く、くちら有極目とやくられ
ぬるねや、わづまんや、川原などにも、馬車の行き
ちがふ道だに、となす、おや、き妙山がつと力
は、きく、新ふさ、きく、あり、行けを、たのむら
たなき、人も、くづ、く、お、城、く、が、ち、く、市、に、出、で、く
き、く、ふ、く、人、が、持、出、で、ぬ、る、く、く、い、た、か、く、一、日、れ、命、を
き、く、ふる、に、だ、よ、及、む、ば、ど、ぞ、あ、や、き、ま、い、か、く
る、新、の、中、ふ、丹、つ、き、白、ぬ、こ、が、ぬ、れ、け、く、所、く、ふ、つ

ま、く、み、ゆる、本、乃、と、れ、あ、ひ、ま、ド、き、り、是、を、尋、ぬ、れ
む、む、む、き、方、な、き、ま、め、く、古、寺、ふ、玉、子、て、仏、を、ぬ、き、み
堂、の、物、具、を、や、ぶ、り、取、り、く、く、く、く、く、く、け、る、な、り、け
て、酒、悪、乃、世、中、も、生、れ、あ、ひ、て、か、る、心、く、ま、い、ど、ぞ
を、ち、ん、見、ゆ、り、く、又、い、と、あ、を、れ、た、る、事、ゆ、り、き、さ
ア、い、く、ま、き、女、男、た、ど、持、ち、た、る、者、ハ、其、心、が、く、く、ま、い、り
て、ふ、く、ま、い、の、あ、く、ず、さ、ま、ま、ま、ち、て、死、ぬ、其、故、も、お、お、
を、を、次、に、な、く、く、男、に、と、あ、れ、女、に、も、あ、れ、い、く、は
く、く、思、ふ、か、く、ふ、た、ま、く、ま、を、得、く、る、物、を、ま、づ、ゆ
ば、ら、に、ゆ、り、ま、あ、り、され、を、親子、ある、者、を、定、ま、れ

る事にく親ぞさきさきと死にける。又母が命を
きき臥せるをいづらていつけあきふれ其乳
ぶさふすひつきはふせるたもありけり仁和
寺に隆曉法印とつふ人かくいつて教へて死
ぬるを悲しみく聖域あまこかきひつてを
れ死首の見ゆるごとくに額に阿の字を書きまじく縁を
結むしむることをなんきくまけるも教を志し
んとし四五両月がほどかぞへたりけれを系北中
一条より南九条より北系極より西朱雀より東
道乃道にある致すべて四方二千三百餘人ありけ

るいけんや其前後に死ぬる者も多く川原白川西
乃系もろもろ此急死などをくまといはし際限
もある處うらげいんをんや徳玉七道を也近
くば崇徳院の時長承乃比のときよがるこあ
ひ有りけりと聞けども世に有様知らずすのあこ
まづとめづら々に悲しかりし事なり。

○治承四年京乃風災^上 同 上

治承四年卯月廿九日^{十日}乃ころ中^{ミカド}涉門系極のほど
より大ききある過風ねらりく六条よりりまざい
かめく吹まける事侍りまじの四町をかけて吹ま

まぐる間も其中にあまれる家ごとがなきあるもち
ひたひたしつがーやぶれざるをなしきたるうら
ひくにふれざるにあまげさばらなうり跡
まぐるも阿り又門此うへを吹きはふりて四五町
がほどふねき又垣をふきまらひく隣とひと片
になせりいもんや家此うら乃資財かずをほく
して空よあがり檜皮ふき板は敷ひ冬の末は葉
乃風よみぐるが如く塵を煙の如く吹まきこれ
たすぐる目と見えずねびとくくなりとよむ
者にとけいふ考も間には地獄の業風なりとこと

かくこそとぞ覺はける。家乃換えまるとのとな
らば是をぞまつくろふ間も分城とことあひかこと
はけるもの敷をくらす此風ひつとさる此方ふう
つりゆきまぐねほく乃人の敷をあせり過風を
つねふくものあれどかゝる事やま阿るたごお
とにあふびざる極きものゝさるうらあざぞう
よとのひたりし。

○元暦二年乃大地震上 同 上

元暦二年の比大あおふる事ゆりま其さまつね
なうべ山くづれく川をうばみ海うことぶきそ陸

をひとせを土さけと水はき阿がりつをほとれと
谷にまらび入り渚こぐ船を波にたよみ道行く
駒を足乃まぢどをまどをせり。況や都れやとり
にも在々所々堂舎塔廟一つとして全うくは感ハ
くづれ或もとふれたる間塵灰まよほりて感あ
る煙乃おどー地の震ひ家のやぶる、音いづち
にまやなすらず家乃中にをれを忽ちにおひー
げちんとまぢりいづれば又地これいさけみんとすく明ふけを
む空つとあごのまぢくせ就ちまらねを雲にのが
らんま難くねそれの中に恐るづりけるを思

地震ありけりとぞ覺侍りー其中にある武士
乃ひとり子の六つ七川をかりに侍りーがつい
ぢのねほひ乃下に小家と作すくばのふげある
跡をーまをしてあそび侍りーが俄ふくづれう
めらきそおとかとあくひくふおひさごのまそ二
つ乃目など一すげのううち出されとるを父母
かへつと考もなまぢ悲しーあひて侍りーこ
そあをれにかあーく見侍りーらふ乃かあーみ
にもたけきとれも恥をすれけりと覺はてい
とほーく理かふとぞ見侍りーかくねびとぞー

く震る事ハ一をーにくやみにーが其餘波ーを
ーは絶えずよのはねふ驚くほど此地震二三
十度ふくぬ日を十廿日過ぎにーのむやう
やう間どほふなりと或も四五度二三度中ーハ
日ませ二三日に一度あど大く其名残三月を
かまやけりけん四大種乃中に水火風いつねよ害を
なせど大地にふりてい殊ある變をなまじむか
ー齊衡乃比りとよ大地震ふりて東大寺此佛
のみぐー落ちなどーてびみーき事ごとけりけ
しどなる不此度にも志のむとど。

○赤えとつふもれ陽年

石原正明

赤えとつふ物いづきと片面はくちば色ーとつ
づきを赤き物なるととえとつひとありぬづ
きを赤えとつふもれなる事なるとつづ
かーうねりへーに陸奥へ物ーたりーはえは形
ーと片面の色淡黒き物を見つ墨拭さすいわけ
とつやうにく端さまにほひやりふ白く鱗の末更
に又黒ー赤えの赤き色の定なり仙臺あつりに多かる物みと土
人はこれをカラカイとつふぞれ黒えとつぞれに
對つて赤えとつふある處ーとねもいとつ後に

○石原正明
尾張國人
ふるが江戸
に住みき

まけむ尾張國篠崎三河國龜一まなごうてをや
う、悪えといふ物ありとぞ。國ふ在りーほど見開か
ざりーをづさうも多かぬふやどれがけカラカ
イ乃まなごう。

○大鳥飛行の速力 閑田 資芳

百井塘雨云をく、楠津國高槻乃先主、領内に將せ
らま一吋山中高樹のうへに嬰見此泣き怪し
てよくとく見流ふに、鷲の巢なり、おを其鷲に
掴来りーなうんと察して、士に命とく、銃砲を放
とーめられーよ、鷲を巢に在るはずよりて人を樹

○あ、み今
といひ次下
といひ五年前
といひる其
年知られず
記者文化
三年ふ七
四歳ふて死
ふ

に登せし、捜求むるよ、巢に中に赤子と鷲乃子と
ありければ、赤子をとりを取らるーと奉りーと
見流ふに、男子なりーのば甚喜ぶーとまひつれ
か、乳をばけて養育せーめられーよ、や、長む
るに後ひ才智、後明なりーま、よ、や、ぐて、ま、お、たり、よ
召使をれ、苗氏を鷲津見と号けられ、祿百五十石
與へられ、子孫今にありとぞ。先主、苗主、居よ、鷲
津見七郎若夫といひー人も其子孫にや、和泉、堺に旭
蓮社といふ、浄宗の寺の、開祖、玄恕上人と、鷲よ、取ら
れ、助かりー人あり、たぐひあり、幸にこゝと、閑田云

とく東大寺良辨上人も同トき也傳記に見ゆ
此因に岡田思由でたることあり四五年前に聞
き加賀乃あつりにあそび浪士大鳥よつりま
ましく空中をゆく二時をり杖経ていつまこと
しらぬ山中ありと大鳥此人を掴みなつり下りて
休みたり此透間を見と腰刀杖抜きつわきと
手を切てついにさし殺し片翼を切りてみれば
片くはく吾身隠るほやふ餘まり幸うとてや
や山城下りて人にあひに其翼を見て大に畏
れしむ其子細をかりてさそくもつづこぞ

ととつむ箱根乃湯本近くなりとつふ遙なるほ
どを後二時を切りて来しに香乃勢はげき
をさうふねどろまぬきとて其途よ運留し
疲を休めと後江戸に出でたれを其翼に付きと
其所以を問傳へ其勇壯をよらとびかてつと乃
諸侯より召まきしにいつとつ仕つと出身せ
るとかや大かと乃人なりと室中にく正氣ふく
ちりぬ意きを堪つとかくまごふまひけるを鳥
のみあつべんとせふめづらなり此鳥は大鶴ある
べしこれ迄も箱根乃途まで折々人れ捉られし

あやありーいおれが所為にてありー此後
此福止みたりと其より喜ぶまゝとあり

○皇威象におよぶ 困窮 自語

藤原紀光

享保十四年廣南國より象をこゝ志一術をまゝ
一にこ乃けものまはめく氣をいむゆ急に船に
うらふほどをはうりむこ乃如きものをこら
へおづゝを入れづつにあみをけりねくゝ象をれ
を見く氣を外へつゝと四つのおよそかれを
このうへをふさぐこれよ心越つゝゆ急に數日
船中ふたつとぞーくらざればこれけもの水をも

えくもゆ急にこらまら海を渡りて帰るとあり
さく象本朝にまらる中應永十五年、南蠻よりく
ろき象をこゝすお乃ほの例見ゆき、黒象は別種
なるをこらとび乃象を灰色なり白象はをあらび
同年四月象を宮中にめー入る中、御門院法皇
あり、臺盤所のみすふ引くとまゝ象をあらびを折り
けり、高類といつとと帝位のことたふとまゝをー
けんやむおやなまゝ中あり、御製和歌よ、
時一あれむくの國をあらげものこげふ九重ふ
んがうれーまはにあら御筆、故殿 光つふ みの

まをりてむらつとふるなり又と乃日靈元院法皇
乃淨所にひつせし淨覽ありけるよこのくびの象か
しらをくれそ思きけるかきも足印けをさふん
佛製やまゝと歌二首
めづ〜〜くみやらよまのめ〜〜や〜〜
野山をづくふさとなる。
あさけあふまきさのすづ〜〜よから人よあ〜ぬや
つこのふおもあれまを。

○猿の人真似 古今著 同集

橋 成季

文學上人高尾真隆乃此見まをりけるに清泚川

乃上ナリに大きある猿兩三足ありけるが一つの猿若
のうへよあふのま〜〜と動うず今二足のまの
きて居たりけり上人あや〜み思ひ〜隠きて見
けれを鳥一兩飛来〜此わ〜猿乃か〜を〜に
居たり志げ〜をかりありて猿のあ〜をつ〜ま
たり猿け〜〜死に〜様まであれを鳥次
弟につ〜ま〜う〜のぼりて目をく〜らんと
しける時猿鳥乃足を取〜ておきあがりふけり
其時残の猿二足出来て長きわづらを持ちて鳥
乃足に付けてけり鳥おび〜らんとま〜れ〜か

ちをばさきてやぶく川よわりて鳥をば水にふけ
入れくがづらはさまを取まて一疋あり今二疋
を川よより魚をかりけり人の務つくひけろを
見て魚をとせんといけろにや鳥を務よつ
ふとめけのふけれとてあつらをせりまに
ぞ思ひよりたりけり鳥を水よあげ入れらま
まけれども其えまなくてまふけれを様ども
を打まてく山ふ入りよけりまふなりまふあ
あつら見たりとて彼上人のわたりけり也

○紅毛人万里鏡を貢ず 閑窓 自傳 藤原紀光

有徳院の贈右政大臣吉宗公天文志を見られ
日中ふ黒子見ゆる事あり本朝にこそまなす日
を光曜甚ぶしけれをたしふ視がく異
國にも見るものありやと紅毛國乃商客ふは
しめられしに万里鏡といつる物ありてされ
見る目を思ふふをぞんがらすといつるたぎを
ふくはへく見ざれを天火目よ入りて眼をそふな
ふといつるふく心をつくをまじり申して
の後万里鏡を貢とま今関東よあり土清門
故二位春親卿を申請ひく日月星辰をかれめが

○今とて
寛政年あり

ねはるうかぶをれいあり。春親卿かきしれい
星を三角六角などありて、そのにさかりく見ゆ。
あまの川を小星乃あつまねるなり。日をもほく
おそらしく月を波見申とぞかめ万里鏡をたき
なる遠目鏡に七八間とありと聞傳へし也。

○柿本人麿に神号を授けし上回 上

和歌三神をいま人乃しるところに任者玉津島が
まのそとなり。あつるふ後奈良院宸記に和歌三
神の号を宸筆にあそむすよまみり玉津島北
神等也。お世の中にあつし書いりさまの柿本のひともうら

を後世石見ふ社を勅造せしとごとく神号のあらざ
りしに中法門院法時享保八年に、此頃子年忘
にねふとつふ沙汰ありて、寛年二月一日、小靈元
院法皇乃沙汰とく大明神乃神号をさづけ
られ、同日に正一位神階、陳よれつて宣下あり。
上卿も中院大納言通躬卿奉行を頭、并於胤朝臣
なり。柿本大明神の号を近代乃事とつふ事、人太
方しるべ又三神乃うちにおまのあつるつふ事
とらぬなり。

○磐の喰残し 続水

中山忠親

次乃清門會極天皇と申し中出乃清時とぞた
ぼに侍る。但馬國に人ありまをさあま女子をも
ちたりまを乃子庭ふけひありま一程に俄に驚
つてきたりま子をとりて東をうて死びさる
ぬ。父母あまかたしめととゆき方をしらば。其後
八年といひ一ふ其子の父ことれゆかりありて
丹後國へゆきけり。宿れる家ふ女乃童あり
井ふゆきま水をくむ。此宿れる男井のまをみく
足を洗ひて立てる程ふ其村の女れまはとと
来集りて水を汲むとありつる。めはは乃く

みとりつる水を奪ひとやとてけれをどくまどと
をむむほどに、此めのまをまどと。たのれを驚の
喰残しどか。いつてまをらをばびるかせにはい
ふづきどとまうち。かばめはまををあきて此
やどりとりつる家へ帰りぬ。男家ぬに、此め乃
まをはを驚のくひのま。と申合ひとりつるを
いのなるまをまをまをを家あまを。ま年のま乃
月日とれ。本ふのぼりて侍り。に、驚をまをまを
をとりて西の方よりまりて。巢ま落し。れと驚
乃子ふかえんとせ。程ふ此子をく。幸かぎりあり

饗の子そ乃考又驚恐れて食をさぐりきざられむご
乃亦く考を問まきくすのちとふりつてとぞおれら
し侍りし子也さきかく申しあひさるふことと
つひをまきくふ我子の饗にさられし一月日あり
此事を問くにあさすくねほひさふまかあり
びと親ふとつふ事知りまき人の命れかざりある
まをおさまりく侍るまなり。

○山本晴幸の明眼片び

藤原春麻呂

山本勘助晴幸を素性賤しく五體不具あれど系
圖正しき剛勇の士ふを遙にまされり或時甲斐

乃諸侍を集めく軍慮の物語する席よ小児三人
交まり小宮山助太郎小山田八弥秋山友市あり
助太郎を談中トづまをくうづくまうくよく問
居しり八弥をわしひて居しり友市ハ退屈して度
度座を立ちたり晴幸おの三児をつくばくと見
て助太郎を赤心うおうぬ大丈夫はくハ弥を去
らら定らば友市を不忠の名をのこすべしやい
ひしよけしして助太郎を後に小宮山内膳といひ
故ありて甲州を渡人しつれども勝頼天目山に
生害乃頃どぞわざはせわく死を共にして義

を立てたり、巴跡を後、小山田八左衛門と名のり、
勝頼生害の頃、善光寺へにげ行き、なり、友市へ
後に秋山内記といひ、又楠は守り、任ず、勝頼生害の
五日以前、又甲州を出奔、敵方の織田信忠へ降
参、つれごと、不忠乃、逆賊ありとく、なり、首う
たれ、より、晴幸を一眼あり、より、見ぬき、より、

○まことの樂み 假名 世祝

太田 覃

四谷に、館屋忠七や、つふものあり、朝をどく、起出ど
て、船を、より、ら、一、家業、よ、ね、より、を、く、少、の、ひ、ま
をも、を、より、して、三、渡、の、倉、庫、の、外、より、に、や、ま、む、り

○四谷江
戸の地名

なり、暮時より、志、ま、ひ、く、風、呂、に、入、り、夫、より、や、ぶ、れ
ふる、び、より、着、服、を、脱、ぎ、す、て、一、黒、羽、二、重、小、定、紋
乃、付、きた、る、衣服、に、着、か、一、黒、天、鵝、絨、の、褥、の、上、に
座、して、さ、む、と、二、三、ぶ、く、ま、ひ、く、寐、所、又、入、る、夜、具
も、纏、子、純、子、乃、類、に、て、お、れ、を、着、く、那、す、袂、あ、け、ぬ
れ、を、ま、す、と、す、た、例、の、ふ、ら、び、より、綿、服、を、着、て、船
を、つ、く、る、事、ま、よ、り、乃、如、し、人、ぞ、れ、意、を、さ、ひ、け、れ
む、人、を、い、つ、る、も、の、を、日、々、た、の、れ、が、渡、妻、に、の、み、心
を、勞、して、慰、む、わ、と、あ、り、だ、と、ひ、外、又、い、つ、た、る、た
の、み、を、あ、す、と、と、其、中、よ、利、を、得、ん、と、思、ふ、心、乃

もふる、時一あけきた心乃ちなぐさめになすべ
たゞ夜眠りしる時をかりまことやせたり一みな
りおれよよ川でさる事を一て性を養ふといつ
り、實に生涯外乃ちたのしむるを八十餘年にてめ
でとく終りよ一山乃ちふすめる友人乃ちか
り一まゝあゝ一とせ。

○自警 日記

大國隆正

沖の干潟に貝とる人を岸より見れを蟻あどれ
うごめくやうよみゆるなりがなごより岸の人をみ
たりんあど又かく乃ちおどくたふる一一人みなかど
の

身乃丈もんはず人よなすび程にくくぶたど一と
志るめりされどそれとひとよりみるほどにくも
しくをいらまばかちあふあらされてかゝる、か
となき身は長だにかゝるものをます一とあゝされ
てんはぬあゝろ乃ちたうさひくさぶらぶらづいづ
人にくらべ一も海はみづめりこそがの人はとあ
人にこそまかりてあつとわたり一人はゆるたぬを
うらもせんか、沖の干潟に貝とる人、磯岸よこ
ちいんあゝの如き、よのほくぞありぬ、あゝあゝ
あゝあゝあゝ一と、鑿定ふまゝのせむ、いづらうた

とがゆひとれずすぢをづくろをすぢぢい
ふづぢあり陸正おれ事をあはにる一とづか
ら警とれまゝと名をあげん利を得んといふ人れあ
らははくしと考へしぞと説をひそくにどうてわ
ぶ説と一又せふつとひてあつらをまづるといひ
乃まゝと打まじ事いだねとすまじとまやよをん

○後奈良天皇紀の逸変写本片 後原亮磨

後奈良天皇の御世に宸筆の御かき物を得まほ
しく思ふ人も金銀をつゝみと望む所乃書名と
記し御簾ふ結付けたくに目を細く巻れた御書

をきし出さるゝよりいつりざる故よやおれ天皇
れ宸筆世ふいと多しとかや其比も是利乃末の
世はと義晴義輝などがたのれ一己乃春よ長じ
天下の政務をと乱す一故に朝廷を益とれとろ
一紫宸殿乃つとら破れと三条の橋より内侍所
乃御燈の光見は左近衛の橋乃下にも茶と蒸と
商ふ人阿室系中には関白家の御料とて徳と以
て米をとりひありまけりといつり其徳今よ二
條殿ふありとちんがととさしてあそ君臣といと
に二世乃内ふ是利の逆徒をじびにけれ

○今ふ
今とハ嘉永
六年なり

○武則公助
下毛野氏
ある夏今昔
物語に見
攝政兼家公
の隨身あり
一夏古夏談
に見に

○下毛野公助が孝行 古今著 岡集 橘 成季

武則公助 法興院殿隨 身冲鷹飼 とつふ隨身父子ありけり右近
馬場乃賭弓ぶろくつりまつりたりとくふ公助
を、けれある所少くうちけるを、あげのく事もな
くてうされけれを見る人いりよにげずてかく
さうとるやいひけれをも、おげ侍りまば衰
老乃父ねんとせんほどれたたれをど、侍ら
むきをめて不便なりぬづけまば、かくのごとく
心乃ゆくほどうとるなりや申しければ、世
の人いも、孝子ありや云ひく世間のたほに、
これよりぞ出でまにける。

○まつらさよひめ乃石とありとつらとつら夏

片ひ
さー

高嶺彦麻呂

大健狭子産をが、國へごとむけよつらなされ
一幸書紀よりあり、妻依用姫おれを、おひ
れより、いと萬葉集も、おれ國の風土記にも
あり、夫を志とひく石とあり、夏を、操あり、按ず
るふ、おれ風土記に、峯帔招因、以為名とあり、を、帔
を、擧げて、振あり、故よ、其山帔振峯と号けり、
なり、為名とつら二字を、為石と見誤りて、慕夫石此

故事をつくりしあるべし。

○曾我兄弟 大石主税神法 堀 秀成

世に曾我兄弟といふ十郎祐成五郎時致は父の仇、
工藤を討さんと年頃心を苦め身をやつし、時
を候ひぬくりし折し、右幕府の富士守の將を
催さんやて國々乃大小名ことおどく鎌倉ふ泰
集ふと聞き、兄弟を曾我の里に在る母の許し系
里一が弟五郎を母乃意あて出家にせんやと、箱
根に登せねきしを出家し、を仇を討つあやか
なをねを密に山を遁れぬりたる母乃意違

ふと、勘當乃身となりければ五郎をを障子の
うげふ隠し、十郎一人母にまみりて云なく、母の
うはと聞させ給ふらん、ふは頃鎌倉殿富士野乃將
ふ出立させ給ふと、國々乃武士ども我方らトと
馬物具等を巻して將場に参り、物敷を、ぬ
某をれごと、此世乃思出、此前代末聞け將場、
立交りなんと思、立ち作り、然れを替時の清勝を
よ参りたる由云ふ、母聞き、を怒り、き、おと
ちふとの哉、父君を、何まこれ時に失せきを給ふと思
ふぞ赤澤山乃切りく、乃帰るさん人乃幕先

わくアミと露と消にまみりにあらずや。持場と
間くごころと心憂きあもなるをぞく涙ぐみて見
ゆる哉十郎ねかしくいつに清女性よれをせ
ばぞく詮あきこやを堂ふものうふ。必はくろづ
あひー流ふあぞれにつけてと富士下^オの朝
風も夏も身しむとのと承るを流下着一つ貸
給つとつを母夜櫃より小袖ひとつ取出く典
一奴十郎ねかしく今生の暇もは後よあそ
知くさ流をぬや心乃うち悲しく小袖乃よに
けりり流る涙を母に知くせと押隠しお母

の傍に居寄りましく他に着せしきとの候ふに今
一つおまをりしとつを問まき母色を切し其
着せしきとれとは誰ごころとぞ乃流河の如に
間くは大磔あさりと思ひぬをせらぬあまとか
さやうなるものに着する小袖をもぬとのを
此母と今も曾我どれに着をれて小袖一つと思ふ
し任せぬ身なるをさふを十郎さやうあると
此と取らせんとそ流小袖は流ひ申さば其着せし
きものもあつやとつ隔の障子ねー開けた
五郎面目なき状にうつもさ居り母を

見て彼を我子にもあらずと云ふ、云ふと云ふ語
をどろへく情なくも堂ふもの、彼も今を北
條殿の烏帽子子ふなりて五郎時致と名乗申を
をおそれ好まき男ふなりと云ふ、のこまを以て我
子にあつたをとも、岡江ぬ清洞なるぞ、弓矢取
る身の門出の習千よ一つ、今日ぞ此世の清別と云ら
む、後ふあを悔ひてまをめと申し、はれをまよと小神
一つ、五郎はと共へ、さる由、其頃の史どとに、見ゆと
て、此兄弟、母乃小神をお着て、将場へ赴き、母乃形
見を我が身に添へ、く、潔く付死せんやの意あり、

す、元禄の昔、大石主税も、母乃朋着を下ふ着込
め、吉良家に討つり、さる夜、雷のよめに池へ落
ちて、その形見を濡し、けり、翌の日、乃朝、泉岳寺へ
く、義士乃人、火ふあ、さる時、主税も、それ身へ属
け、形見乃衣の濡れ、さるを取出て、火に乾し
居るを、父は良雄と見て、涙をとり、さるなり、さるが
彼を、建久の昔、此も元禄の時、彼も孝子、此は忠臣
それ、忠孝と時代とを異なれど、と、な、に、親の形
見を、身へ添へ、く、志を遂げ、さるを、同日の徳と、いふ
べ。

○單物

帷子けいこ

富岳考卷

當世も絹本綿布も裏ふきを單物といひ生絹麻などの類を帷子といひく着る時節も差別ありさうぶきこころにあらずもさう裏ふき衣も皆單物なりびとくあるが故小片といひゆよひくめぐ故にひらといひく同ドもあなり浴衣をゆかるところも湯帷子乃義あり頂上乃領巾も甲冑の母衣と軍器の旗も魚乃鱧も鬘まげもヒラの轉語にて同義の名なりヒラメクハタメクあど同言ふ

○儉と吝と乃別

槐陰 糺記

福田利茂

儉約と吝嗇とを天地懸隔の違あれど事のすがたよく似たるゆゑ思ひあやまる人多しゆりて今つまびらるる古人の行状とく分別し置くなり堀左衛門督を世に名人秀政といわれし程乃人ありある時家人乃勤勞を褒美して金百兩をよづから賜ひくぞを包め里し紙を丁寧よのてひめ置かれきとぞ又黒田如水を世に聞ゆる英傑なり。征韓の役に日根建備中守銀子二百枚を如水にかれり後ふかりける銀子をかへさんと如水が許し行

きしに如水近習乃士ふたまにりりひも鯛枝料理しとぞれ骨を烹てまらうぞをまてあまぶしとひつけやう骨をまかふよて心よく酒を酌まれり日根野。實に志とま男かあまきげすみまきたかりとる銀子をゆして返志しふ如水をどめより返したまをらんとれ心はる。僕業らせしるにもあふずといひて手ふぶふとられざりまことぞ又本田内記白川の城をたまりはとかや新泰乃士に小笠原平内といふ者あり妻をも迎へて獨身よて明輩へ音信贈答せし勤仕の外他に出づる事も

なけれど家中の悪評さやまをれど奉公方怒りなく勤めけむを主君のねほほとよく十やせあまりになりぬ然るに平内いふ思ひけん俄にあれをてとる長屋より書院臺所ふむるまで新に造他し成物比上近隣又も相番の士に丁寧にせうそとて家へ清く返つぬ人々あのうとて男何するやうんと残らば誘きてゆきしふ玄關にも弓矢砲そ乃外乃武器をおざりまて書院の造りさま床の掛地花瓶だをこ盒にいとるまで美を考たり海山のもれさままてうと出で

ておとごころにもうなせり。酒とあるば過ぐる比、
 平内悪塗ふしとる枕乃如きことれを提出てく人
 人に向ひ是を陣枕なる是は付まをりしき出
 ありやうなくとと岡まて玉をれり。下官^{ヤツガレ}汚家
 ふつの一始年若に獨身なり。十年萬丈堪思
 まぶき盟をきて二百石の分限ををらぬ。百三
 十石に肉澄を暮しと一毎に七十石餘せり。去
 年まで十年の數みちて金二百七十八兩得たり。よ
 つて此春ねりひまち家の造作二百兩武藝に七
 八十兩残つる百兩あり。これを箱に入れ見ふふ

ごとく悪塗に家の紋を蒔繪しとる。是をた
 やすく取出でがたく事あらん。時乃料みせんや
 存トゆふありもけや年比の願ひかふひしむけ
 ふよりえんこふと親しくまどらひ侍らん。年比
 うとむし一罪をなとがめ玉ひそと打りしひけ
 れを日比のしりしらひ一人々身も滑入りしき
 心ちしきとど右の三人の行状もくいとど堀秀
 政が褒美の百金を包み一枚乃紙ををりみ。又
 如水が人ほとらひ鯛の肉を惜み骨を調理せ
 られし又ふ笠原平内十とせれ間人ふ交をくす

音信贈答もせざりしさまを、俗眼をもく見ると時
を貪欲とて吝嗇ともいふ也。されど秀政を功
を賞し、百金ををりまじ、如水を朋友乃義を主
て、かゝる二百枚の銀子をさぐり、年内を十年
の間雑費を省き、武備をたらし、公用を備へ
しを公用を省き、有用をたらし、節儉の道を
よく知守れるあり、儉約を治國齊家の良法、吝嗇
を滅國亡身の惡道なり、ゆゑに人よく儉と吝と
乃分別を會得し、やうなき雑費を省き、安ん
時の料を備へば、事小隙みたらぬことなるの

るべし。されど人情乃癖とて、これ質、潤達ある
人も節儉を守る事なり、かゝる節儉をよくする
人は、吝嗇も流れやまじ、ゆゑに我家のうみ乃子
の八十つぐままで、節儉を守り、吝嗇にあがる
ことあやうし、ゆんとかく拙き筆をうゑよと例
の老婆心あり。

○伊勢國玉まつま

本居宣長

伊勢の國をかく國乃うま、國と古語もつひ
て北のまより南北はてまで、西乃方を山とつ
らなり、つゞきを、まよとに春極をあせり、東の方

を入海にむべせの海といふこれなりかくさつづ
ことづつこと山と海との間ひろく平原にして北を
桑名より南を山田まぎせ里あまうりがほど山や
いふ物一つもこゆるおとなく、ひこつてまの國原を
りぞれ間にひろき里くねほりる中に山田、安濃
津、松坂、桑名などおとよにまはけくく大まなる
里なり大うと京より江戸まぎせ七國八國を経て
ゆく間にかむかり此大里を近江の大津と駿河
乃府とをねまをあることなり外の國とも思
ひやうるふほ件の里くにつぎく、四日市、白子な

どよき邑なりかくく此國海の物山野乃物ずべ
とどとーううげ暑き寒きも他國ふくらぶるに
さーも甚ーくうず但し、さむさを北の方へよる
まゝに次第又寒ー風をよくうく國なり國のに
ぎはーきおとを大津神の宮ふまうづる旅人
とゆることなくおとに春夏の程をいつといやに
ぎはーき事大くこと天下よなるびをー土お江
て稻のとより、よなるつ物も畑つ物と大うさ皆よ
しかくて松坂をことよよき里にく、里のひろき
事と山田につぎくれど富める家ねほく江戸に

店とりふ物をかきくたきく手代といふ物をた
ほくあらしむおきまひせまをあるども國に
のゝ居るあそびをりうはづをきりもあうでう
ちうちをりくゆかたねごりて日ふるすづ
て此里町まぢゆらみふらば家あみまろく
一つごごよ一尺二尺づ、出入アそひとかりん
といと志どけなゝ家居をきりもいりめかり
ずきれど内こ乃まきひをりり水もよき所
と日ろき所とありそひとく川水まろく
く潮とまぬを船うよをすふ一も大方一里あ

まり海へもま里あまき諸國のこりりよまどに
系江戸大坂をたよりり諸國の人乃入りくる
國なれをいづこもいづこもなまりり人乃心
をよくとあらしむごりまをすくをり人の
かちち男も女とお中びとをさくになくよ
ろし女も里乃ゆりふにまきりす
とよそひすすてをさをさ系よねとれるまや
なへ人乃物いも尾張の國より東の國こいなまり
おほきを伊勢をちりなまりりざれど山城
大和あど、は何となく考いやりく河といやり

こと多しつをゆる異服、小間物のたぐひ、松板をよ
き品を用ゐり、山田、津ふどととも、こよなく代物を
しざれむ、商人の系より志いる、物と松板いふと
小物よく、上々のおなり、系のあま、人つねに、未か
よふなを、時ころちやり物とをり、過さば、諸藝い
所、うらにあを、さをもよ、さことあ、げもらも
ろ、此細工いと上手なり、あま、あひおと、はぎを、し
芝居見せ物、神社、仏閣、まづ、くに、ぎを、い、ま、ま、づ、く
此國を、他國、乃、人、ね、ほ、く、入、ま、お、む、國、な、る、故、よ、ら
ら、ぬ、物、と、ね、ほ、く、盗、な、ど、と、多、く、松、板、も、魚、類、地、菜

な、ど、す、べ、く、申、こ、の、な、り、ざ、れ、ど、魚、に、も、鯉、鮒、す、く
なく、野菜に、も、く、く、の、蓮、根、な、ぞ、ま、く、な、く、松、板、の
あ、か、ぬ、半、の、町、の、筋、乃、正、く、う、げ、志、ど、け、あ、ま、と、
船、の、か、よ、を、ぬ、と、な、り、。

○筑後州山門郡本郷馬場記遺文 集笺 富士谷成章

つ、た、も、の、く、も、ち、か、こ、う、た、に、ま、う、れ、ど、の、く、ふ、れ
ど、ご、さ、ま、ご、ま、ふ、ね、ほ、う、る、中、に、ら、と、馬、と、を、し、も、
む、ね、と、せ、る、あ、とは、遠、ま、に、ね、ま、び、お、く、を、ほ、ら、が
さん、は、を、ら、あ、け、る、な、れ、な、く、さ、が、あ、ま、ま、を、こ、
り、か、こ、ま、を、く、ご、ら、ん、に、い、馬、に、け、る、もの、な、け、れ

むあり。一はあれどふあつたす矣の力をかれ
ひとりあつた乃あり。うをたひらげやつをふ
みこゆるひづめのいまほひたそのあつちの軍よ
やぶつづけれをなほ馬をまらるゝとさささし
てこそどろもろ乃兵のとさもすさる感らめれ。
今穿れ君あまうりふ政を志く。めさせ給ひひら
く民を恵ませ給へむと本乃きをま。たどろく
幸なく千年の川乃すみよまを樂める幸道の君
乃古はとこほれどなほ。づまのなをまされる
にめなれと書柳のいものみづれをよすねどとお

ぼりめして歩みづ。をけ。めまうてさふらふ
人こそぞ兵乃道を明暮にあふひまはめぞの
たのよきあり。まけぢめを定めさせ給ふ中に馬
をまらる道はあんどりよま。わのくせさを給ふ
矢崎の降清水降宮今村祐辰等ぞれ道に。た
るふたをう。せ給ひと。や。い。の。も。本
郷といふ所にうまをつくら。め給ふ。四箇所通
久その中をうけ。ま。り板井種長おれがすけ
りして。只ふ。月をかり乃ほごに。め。た。く。つ。く
りなてつか。て。ね。ほ。も。ま。る。く。ふ。ま。を。ま。ら。づ。

たづなをかたす人よむぢあぶこの音蹄のひび
まこと所えて岡ゆるをぶらせ流ひつゝ清浄を
るまに此まごら光そよのこにあぐげだうこも
のくふれ道のやさういづ遠つ流おやの流いさを
しもあうをれびろまみさうひ乃うらだひくう
ふをさすりあんろを流くろゆきをわげぼーめ
しよろこたせ流ふまかざりなりかくづくうれ
うせ流ふもどめをさるひづまより成章よれや
せごやあれをげふ昔のつゝなきをまかたりみ
ずあよくらゆるまとのををいひびきたるまら

るこやをあやーまきひとつよあまねまき流めぐ
みをかうぶらんぶらこびにこぬのみにあぐげ
すづくみさうひ乃人ごまよかたりつぎつゝか
しこま流れまををあぶまてふのま流いつく
みをしれどなり

寛永八年戊寅九月 藩臣平安富士谷成章謹撰

○信田森の尼鷲 古今著 圖集 橘 成季

○鳥羽宮
後白河天皇
の御子定惠
法親王よま
す

鳥羽宮、天王寺別當よりかの寺の五智光院に流
府ありける時、鎌倉前右大将よせられけりける。
三浦十郎左衛門義連梶原景時ぞ供よけりける。

津對面の後退出の時、カク弱の尾一人いで来り、右大将
に向ひて懐より文書を一枚取出して云く、和泉國
は相傳の所領のゆふを人よたしとせられてゆふを津に
引ひどごと身の延弱よりりて、まゆのゆふ適く、本君師
上洛の願を申入れゆをんと仕ゆどごと申し、本は
人よゆをねをたゞ直に足業よ入りゆをんとて奉
まゆふとてその文書を掛けたりければ、大将とつ
かどりて見送ひけり。文書の如く、一定相傳の
ゆふありあるやとせられけきまといりて、本修をを
申上ゆふも、津のゆふを人に更よかくれあるまどと

申しければ、義連に、本硬とづねく、本糸れと仰せられ
て、本出して奉りければ、本墨御すりく、本筆深めく
らちあんじく、本かどの持送ひたりける、本扇ふ、本一首乃
歌を書送ひけり

いづこなる志のぶのまりのあま、本筆たかとの古
枝に、本ちかつるづーがく、本書きく、本義連におれふ
判くを、本つる尾よとせよとて、本なげつかちりり
ければ、本義連おくを、本つる尾に、本とびてけり、本年月月
日みと及むを、本右大将、本殿自筆乃、本津書下なれを、本子
細に、本やねよぶも、本その如く、本か乃、本尾領知し、本けり、本とぞ

いふ一つの文乃詞のめでとくをわきまさまをま
なびてさるふりにとわきなうぶづい。文のさま
をわきまかうでも人乃めとむる事もなくい
くつとちからんにもわきまを見てもわきま
いさくてうちおくづければおきてもなふのり
ひかはあるづきざれをおけくれおまなびな
ひよくわきまほしきことになん。

○歌を何の考ふよむものぞ上 同上
歌をなふのさめふやうありてよむものぞとい
ふまをすづおきらめりてそのよむづきやう

のりあを思ひまづ。たさつを、右刀はま
るさめふやうあるものさるえてうちふる
ことさのよあをりふごごさるせざれを
よとさるもあさるふごごさるのさるめふ
あさるざれあし言の葉の道ふみとむるあも
さるごごるうづきまふをありけるそのあま
めさるづきやうをゆゑあるをりまとあしん時
ふたもふごるをたふつひてをいりお詞を
つくしてつとさるがざりあれをあたれと人の
まさるまきを歌を見るもの聞くものにつけて

情ふらく詞をわく志めやうふりふとのあれ
む人もあされとめでく其りふ妻をふらくま
いれぬべしおく妻ふやうあるふよりてよむも
のぞといふ半をしるふふんざりてそのま
この歌のさすをえんとよみならをすほどふさ
どびてあさくさならなり情もねのづくらみ
やびくふかく物のあまれしよよき情よある妻
ぞかゞれあん物といふものゝ大むね也ける

國文讀本第二冊

明治二十六年十月五日訂正再版印刷
同 十月八日發行

壹冊定價金廿錢

版權所

編纂者

橋本光秋

大阪府東成郡九條村大字九條番十六番屋敷

同

小田清雄

大阪府下堺市大町東三十四番屋敷

印刷兼
發行者

森本專助

同南區心齋橋筋壹丁目六十七番屋敷

專賣所

松村九兵衛

同東區備後町四丁目八十五番屋敷

同

石井鈎三郎

尾州名古屋本町七丁目

片野東四郎

京都御幸町柿小路北へ入

藤井孫兵衛

全寺町通二條南へ入

若林茂一郎

全寺町通押小路北へ入

梅原支店

東京京橋區南傳馬町壹丁目

吉川半七

全日本橋區材木町貳丁目七番地

林平治郎

全日本橋通壹丁目

大倉孫兵衛

全神田區裏神保町壹番地

敬業社

大賣

捌所

